彼は満二十二歳の夏、敗戦を迎えた。

戦後のもっとも苦しかった三年間ほどを長崎で過ごし、昭和二十三年、結婚。相手は、長崎での下宿先の長女・和子。旧姓蓑川。婚姻届は六月二十一日、熊本県人吉市長宛に出されている。

翌年、長男の賢悟が誕生した。現屋久島大社の宮司である。

産後の肥立の良くなかった和子は、まもなく他界した。

悲運といおうか、その心の傷手はまことに痛ましい。

その後昂は再婚した。そして三十五年一月まで、製薬部門で父親の意を受けて働いた。

被爆した放射能のせいか、疲れやすく、いつも「疲れた、疲れた」と口にしていたという。元銀行マンだけにバランスのとれた経営感覚を備えていて、父とはまた別の、静かな、やや神経質なタイプの青年だった。

猛烈に突進する昌範の経営は常に経理面の苦労が絶えなかった。必死に支えていた昂の身体は、次第に放射能にむしばまれていった。

そんな生活のなかで、昂は不意に倒れ、満三十七歳にまだ半年も残して、帰らぬ人となった。

活発に動き始めた販売会社から、製品の督促が続いた。だが、製剤工場には原料となるガジュツが足りなかった。

屋久島では、昌範の実弟・柴宗太郎が、総責任者として、栽培の奨励から産物の集荷、乾燥、出荷の衝にあたっていた。

けれども、作付けの増大は、日々月々拡大していく販売側の要求テンポに追いつかなかった。

とにかく絶対量が足りない。口永良部（くちのえらぶ）島の野生ガジュツ根の買付けが行われたりしたのもこの頃である。

口永良部島は、屋久島海峡をへだてて屋久島の北西十二キロ、手を伸ばせば届きそうなところに見えている火山島で、上屋久町の行政区域に属している。

離島の離島。周囲四十三キロ、面積三十八平方キロ、最高点六百五十七メートル。昭和二十五年頃二千四百あった人口は、都市への流出によって十年後には千四百人となり、また十年後には四百人となり、最近では盛時の十分の一以下となって、高齢化した過疎の地となっている。

昌範は三十一、二年の頃この島へ渡り、区長の種子永進と会っている。種子永は昌範に

説得されて昌範を信じ、自ら地元民への説得者となった。

口永良部島では主たる換金作物として甘蔗（サトウキビ）が奨励されてきており、ガジュツ栽培の提唱は代金支払いについての不安感もあって半信半疑の目で見られ、にわかに一般化する状況にはなかった。

しかし、昌範と直接会って話をした種子永は、島民の将来のためには甘蔗をやめてでもガジュツ栽培に取り組むべきであるという見通しをえて、その普及に情熱をかけ、島の基幹農作物としての育成に力を尽くした。

利害打算で動く業者相手の甘蔗作りよりも、真剣に島民のためを考えてくれる恵命我神散に協力する方がよい、という種子永の意見に対して、そうすることが種子永の個人的な利益に通ずるかのような見方での陰口もあったらしい。けれども、甘蔗はまもなく行き詰りをみせ、区長の見通しの正しかったことが実証された。

「恵命我神散によって必ずこの島は豊かになる。皆さんがほんとうに喜びあえる日がくる。私がきっとそうしてみせますから……」と語りかけた昌範は、この島に深い愛情を寄せ、約束を果たし続けた。

昭和三十五年、生産実績二万斤から三万斤（十二トンないし十八トン）の頃、ここに乾燥工場を建てた。

将来の増産を見込んで工場が建てられたことに種子永は感激もし、「痛切な責任を感じた」という。

乾燥工場が落成して島民の信頼も高まり、栽培も大幅に伸びるだろうと期待されていたその矢先、種子永は妙な噂を耳にした。

道路から工場倉庫の中の半製品が見える。

「見ればいつまでも在庫がある。いっこうに売れん。これだけ在庫をかかえて売れんとなれば、栽培したところで、もう買わんといやせんかしらん？」

と、農民が不安がっているのだった。種子永は、昌範にこのことを話した。

「あるからいいんだ」と、昌範は説明する。

「在庫がなければ困るのだ。いま収穫していま売ってしまう品じゃない。あるからいいんだ」と。

しかし、いくら説明しても、島の人たちの観念はそうした特殊事情を受けつけない。

「いっこうに売れん。こりゃ、銭を貰いだすだろうか」ということになる。

このため、種子永は原料代金の支払いを十五日区切りとして間違いなく行う約束をきめ、会社からの送金が遅れれば自分が肩代わりし、その頃の金で二十万円、三十万円という借金をしたりしながらも期日ごとにきちんと支払いを済ませ、そうすることで島の人たちの理解と信用をとりつけていったのである。

昌範は口永良部の発展のために、実にさまざまな貢献をした。

昭和三十五年一月金岳中学校のピアノ購入に際して二万円を寄附したのをはじめ、同二月に金峰神社拝殿改築に五万円、三十八年道路舗装に五万円、三十九年神社鳥居建設に二十万円、道路舗装に五万円、そして敬老会への寄附が五年間に四十二万円。

年間十五、六万円の寄附であるが、四十年代に入ると、寄附の種類も金額も急増していった。

種子永は丹念にこれらを記録しており、用箋七枚に書きぬいてくれた。そのリストには動力ポンプ地元負担金、学校の放送施設、一般用テレビ協聴施設、街灯、駐在所の敷地と建築費および備品一式、発電所の新設、電気事業への継続的な補助、その他、本来なら行政が負担すべきさまざまな経費がずらりと並び、昭和五十四年までの二十年間に、総額一億二千五百万円以上の寄附が行われたことがわかる。

上屋久町役場発行の「町報かみやく」（縮刷版）には、こうした関係の記事がよくとり上げられている。

口永良部島は霧島火山帯に属する火山島で、岳は噴煙をあげている。港は、古来、南島航海の避難港として利用されてきた。釣り場に恵まれ、島内各地に温泉が湧き、国の天然記念物に指定されているエラブオオコウモリが生棲している。

この島へ渡るためには鹿児島からいったん屋久島へ渡り、一日一便の町営の定期船に乗るか、漁船をチャーターするしかない。

昌範が乾燥工場をつくった頃は、折田丸が鹿児島港と屋久島の主要諸港と口永良部港を巡航しており、二日に一便、四日に一便という状態であった。

人口は減りつづける。

人々は風物に憧れて都会へ出るのではない。便利な暮らしに惹かれて島を棄てるのでもない。基本は経済である。暮らしが立たないから、少しでも楽な生活を求めて出て行くのだ。

その実情をみて、昌範は、恵命我神散原料栽培に取り組んでくれる人たちの島が、貧しくて不便で人が逃げ出すような土地であってはならないと考えた。恵命我神散をつくるこ

とによって豊かな暮らしが成り立つということが、昌範のこの事業への取り組みを最初に動機づけた夢だったのである。

前半生の終わりに摑んだテーマを後半生かけて追求し続け、ようやく軌道に乗り、多少なりとも経済力を得るようになるのは三十年代も終わり四十年代に入ってからのことであるが、彼は、為すべしと決意したことのためには金を惜しまなかった。もともと、なければ自分の着ているものを脱いで人に与え、借金してでも人のために払ってやる性分の人だ。当時の上屋久町報の編集担当者が、この、島にかける昌範の思いを「異常な程の情熱」と表現しているのもうなずけよう。

その熱情が人をうたないはずはない。

島の人たちは昌範を慕い、生き神様のようにいう者もいた。

ところで、恵命我神散の創業は昭和八年であり、医師最上宏名義で製薬許可の下りた十二月五日をもって記念日としているのである。むろん、実際の取組みはそれ以前から行われていたが、昌範は昔をかえりみて、昭和八年は生涯忘れることのできない難行苦行の時代であった、としばしば語っている。

販売会社(株)恵命堂の設立、昭和三十一年は第二の創業の年であり、それからほぼ三十五年頃までが、あらたな基礎づくりの時期に当る。昭和三十年代の後半から四十年代、そして五十年代へと、安定した拡大発展が続く。

この第二の創業の時代、販売面はもとより原料の生産、製薬加工、すべての面にわたって企業としての形が整い、様々な面で新しい前進がみられた。

後に述べるように、恵命我神散に対して昌範自身の手でただ一度だけ製品成分の変更が加えられたのもこの時期、昭和三十四年である。

口永良部島の乾燥工場の落成した昭和三十五年が一つの区切りといえよう。

事業としての側面からいえば、以後はこの時期に基礎づけられたものの展開であり、発展である。

昌範の歩んでいく道筋の要所要所に必ずしかるべき人物が現れ、自然の成行きが然るべく展開して事が成っていった。

昭和三十五年、柴昌範は満七十歳。依然として青年のごとき熱情と底力ある行動力を示していた。